



**Data** 2023-109

監督：チャド・スタエルスキ  
出演：キアヌ・リーブス/ドニー・イェン/ビル・スカルスガル  
ド/ローレンス・フィッシュ  
バーン/真田広之/リナ・サ  
ワヤマ/イアン・マクシェ  
ン

## 👁️👁️ みどころ

ハリウッドはシリーズ化が巧い。第1作をヒットさせ、“伝説の殺し屋”ジョン・ウィックのキャラクターを定着させると、第2作、第3作、とその世界観を拡大させてきたが、『ジョン・ウィック：コンセクエンス』と名付けた「CHAPTER4」では、舞台も共演者もスケールが超拡大!“コンセクエンス”とは“結果”“結末”だが、本作にはなぜそんなサブタイトルが・・・？

主席連合（ハイテーブル）、コンチネンタル・ホテル、指輪、誓印等、本シリーズ特有のバックグラウンドの理解と共に、ルールに生きる男たちの厳しさや切なさをしっかり感じ取りたい。

大阪を舞台にした映画は『ブラック・レイン』（89年）と『マンハント』（17年）が代表だが、本作では真田広之がジョン・ウィックの旧友である、大阪コンチネンタル・ホテルの支配人役で登場！ジョン・ウィックを抹消しようとする主席連合から全権を与えられた侯爵が殺し屋として差し向けた、盲目の武術の達人ケイン（ドニー・イェン）も旧友だ。この3人を中心とする“大阪バトル”は、かつての豊臣家を巡る“大阪冬の陣”“夏の陣”以上の迫力だから、それに注目！また、トコトン旧友との恩義にこだわる真田の日本的な武士道精神の美学にも注目！

“復讐物語”は古式に則った1対1の決闘になるが、その前に抹殺してしまえば、決闘は無用！侯爵のそんな企みを克服し、ジョンは決闘の場に臨むことができるのか？歴史に残るであろう「カー・フーアクション」と「222段の階段落ちアクション」を経た後、本作ラストで実現する決闘シーンには、あっと驚く、ネタバレ厳禁の“ヒネリ”があるので、それに注目！これは、「巖流島の決闘」や「OK牧場の決斗」と並んで歴史に残る決闘シーンになるはずだ。

**なお、本作にはエンドロール終了後に第5作の予告(?)も登場するので、お見逃しなく!**

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■「CHAPTER4」は舞台も共演者もスケールが超拡大! ■□■

キアヌ・リーブスは、『マトリックス』シリーズで大人気だったが、近時は『ジョン・ウィック』シリーズの人气が急拡大! 『ジョン・ウィック』(14年) (『シネマ37』77頁)ではじめて登場した“伝説の殺し屋”ジョン・ウィック(キアヌ・リーブス)は、ロシアンマフィアと対決する中で、そのキャラクターを全開させた。続く『ジョン・ウィック:チャプター2』(17年) (『シネマ40』未掲載)ではイタリアンマフィアと対決し、シリーズ第3作『ジョン・ウィック:パラベラム』(19年) (『シネマ46』394頁)では、遂に“主席連合”と対決することになった。それから4年。シリーズ第4作が『ジョン・ウィック:コンセクエンシス』と題されて公開されたが、「コンセクエンシス」とは一体ナニ?それは因果・結果を意味する英語だが、「CHAPTER4」はなぜそんなタイトルに?

シリーズ第1作は、裏社会から引退し、死んでしまった妻から送られてきた子犬と共に、1人静かに暮らしていたジョン・ウィックが、その子犬と愛車を奪ったロシアンマフィアの“バカ息子”に対して復讐を遂げるという、かなりプライベートな物語(?)だった。しかし、第2作からは“主席連合(ハイテーブル)”“コンチネンタル・ホテル”“指輪”“誓印”等の『ジョン・ウィック』シリーズ特有のさまざまなバックグラウンドや、約束ゴトが提示され、『ジョン・ウィック』シリーズ特有の壮大な“世界観”が提示される中、組織のルールと個人の生き方の矛盾に苦悩する、ジョン・ウィックの生きザマ(戦い方=死にザマ)がテーマにされてきた。シリーズ第2作、第3作で、彼は幸いにも壮絶な復讐劇に勝利し生き延びることができたが、今や“伝説の殺し屋”ジョン・ウィックは主席連合から追放されていたから、「CHAPTER4」はどんなストーリーに?そう思っていると、本作の共演者は香港映画界を代表するアクション俳優、ドニー・イェンと、日本を代表するアクション俳優、真田広之だからビックリ! 「CHAPTER4」は舞台も共演者もスケールが超拡大!

## ■□■最初の舞台はヨルダンとニューヨーク! その展開は? ■□■

デヴィット・リーン監督の名作『アラビアのロレンス』(62年)では、そのタイトルどおり、“アラビア色”を堪能することができたが、ハリウッド映画たる本作の冒頭の舞台も、同作と同じように、ヨルダンの砂漠。私の大好きな映画『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)の冒頭は、アルプスの山の上で歌うジュリー・アンドリュースの姿が次第に大きくなっていく空中撮影から始まったが、本作はヨルダンの砂漠をジョン・ウィックが馬に乗って疾走する姿を空撮で追っていくシークエンスから始まる。

ニューヨークの地下犯罪組織の王、パワー・キング(ローレンス・フィッシュバーン)

のもとで傷を癒し、準備を整えた“伝説の殺し屋”ジョン・ウィックは、今、ヨルダンの砂漠を馬で疾走し、裏社会の最高権威である主席連合の上にいる首長に会い、彼を撃つてしまったからすごい。これは、前首長に大切な指輪と自由を奪われたためだが、そんなことをすれば、彼は主席連合そのものを敵に回してしまうことになってしまうのでは・・・？ そんな心配をしていると、案の定、その“とぼっちり”は、ニューヨークのコンチネンタル・ホテルに及んでいくことに・・・。

早速、ニューヨークのコンチネンタル・ホテルに現れた告知人（クランシー・ブラウン）は、ジョンと長い付き合いの支配人ウィンストン（イアン・マクシェーン）に対してホテルの廃棄を告げたから、こりゃ大変。この命令は、主席連合から全権を与えられたフランス人の侯爵（ビル・スカルスガルド）の命令に基づくものだったが、侯爵に呼び出されたウィンストンはジョンが生き延びて反旗を翻したことの責任を取らされて追放処分となり、同行したコンシェルジュのシャロン（ランス・レディック）は処刑されてしまうことに。そして、何とあのコンチネンタル・ホテルは爆破されてしまうことに・・・。

さらに、本作で初登場する侯爵は、裏社会を統べる主席連合から全権を与えられたフランス人だが、ジョンと彼の協力者たちを抹殺するため、盲目の武術の達人ケイン（ドニー・イェン）を召集。ケインはジョンの旧友だが、任務を遂行しなければ娘の命が危うくなると脅されると、止む無くジョン・ウィック殺しの刺客になることに・・・。

## ■□■次の舞台は大阪へ！この撮影はきっと△△ホテル！？■□■

日本を舞台にした映画はたくさんあるが、そのほとんどが東京だ。ちなみに『君よ憤怒の河を流れ』（76年）（『シネマ 18』100頁）の舞台は北海道と東京、『キル・ビル Vol.1』（03年）（『シネマ 3』131頁）の舞台は沖縄と東京だった。大阪を舞台にした最も有名なハリウッド映画は『ブラック・レイン』（89年）だったが、近時はジョン・ウー監督が『君よ憤怒の河を流れ』をリメイクした『マンハント』（17年）（『シネマ 41』117頁）の舞台も、あべのハルカスや中之島等の大阪だった。

しかして、ヨルダン、ニューヨークに続く、本作の次の舞台は大阪になるのでそれに注目！そこで登場するのは、高級ホテルのコンシェルジュとして働くアキラ（リナ・サワヤマ）の姿だが、アレレ、このホテルは私が昨日の某パーティーで行った、あの高級ホテル！？ そう思っていると、アキラの父親で、大阪コンチネンタル・ホテルの支配人であるシマヅ（真田広之）が登場し、父娘の間で何やら深刻そうな話し合いを・・・。

アキラが心配しているのは、主席連合から追放され、その首に多額の懸賞金がかけられたジョン・ウィックの旧友である父親が、ジョンと関わり合いを持つのではないかということだ。シマヅは娘のそんな心配を一蹴したが、実は・・・。

後述のとおり、本作のスケールは大きく、手に汗握るアクションシーンの迫力と多様さにもビックリさせられる。したがって、本作はシリーズ最高の出来になっていることは間違いないが、主席連合から追放され、命をつけ狙われているジョンが、いくら旧友とはい

え、バレたら迷惑がかかることが決まっているシマツの下に隠れようとするのは如何なもの？西洋人の感覚では、それは当然なのかもしれないが、“武士道”を重んじ、義理人情を尊ぶ日本人の感覚では、「万が一にもそんな迷惑がかかるかもしれない」行動は取らない」というのが常識だ。

そんな心配をしていると、果たして大阪コンチネンタル・ホテルには、侯爵の右腕チディ（マルコ・サロール）が戦闘部隊を率いてやってくることに。さらに、そこにはケインも現れ、シマツに対して主席連合への服従を迫ることに。ジョンとシマツとケインは、かつてともに殺しの腕を磨いた仲間だったが、“兄弟の絆”を尊ぶシマツがジョンの引き渡しを拒むと、ホテルは聖域指定が解除され、血みどろの戦いが始まることに。

## ■□■大阪バトルには賞金稼ぎも参戦！旧友同士の対決は？■□■

私が知っている△△ホテルは大阪城の近くにあるが、大阪城は外国人観光客にとって必見の観光名所。そこは日本特有の鎧兜を中心とした博物館としての価値も高いから、ハリウッド映画のアクションの舞台としては絶好だ。したがって、ジョンとチディ率いるその部下たち、そして、ジョンとケインとの銃と刀、マシンガンと生身の肉体を駆使した戦いは、次々と貴重な“宝物”をぶっ壊しながら、見せ場が続いていく。ジョン・ウィックの得意技は“ガンフー”だが、盲目のケインは剣の達人である上、銃も使いこなすから、その殺しの実力は“座頭市”以上！？さすがのジョンもそんなケインとの戦いで苦境に陥ったが、それを助けたのは、愛犬を連れた名無しの追跡者トラッカー（シャミア・アンダーソン）だ。彼もジョン・ウィックを追う賞金稼ぎの1人だが、どうやら彼は「もっと賞金が増額されてから殺した方が得」と計算した上で、「ここはまだ殺すのは早い」と判断したらしい。

他方、混沌とした戦いの中、シマツはジョンを逃がすためケインと対峙したが、それは一体何のため？いくらジョンが旧友とはいえ、主席連合のすべてを敵に回し、今は逃げ回っているだけのジョンのために、なぜシマツが命を懸けなければならないの？娘の命に危険が迫る中、やむなく侯爵の命令に従ったケインには、そんなシマツの気持ち（武士道？）は理解できなかつたらしい。そして、シマツとケインの対決は結局、ケインの勝ちに。ジョン・ウィックのためにあつけなく（？）命を落としてしまった父の姿を見て、娘のアキラもケインに向かおうとしたが、もし本当に斬りかかっていったらアキラの命もなくなってしまふことは明らかだ。そこでケインから、「お前は生きろ！」との言葉を聞いたアキラは、万感の思いの中でその場を立ち去ったが、これは「シリーズ第5作」の中にアキラによるケインへの復讐物語が挿入されることを予告したもの・・・。

それはともかく、これにて下派手なアクションをたっぷり折り込んだ大阪を舞台にした物語は悲しい結末で終わることに。もっとも、シマツは死んでしまったが、ジョン・ウィックはなお1人で梅田駅から電車に乗って侯爵の手を逃れることができたから、さあ次に彼が現れる舞台は？

## ■□■1対1の決闘の道が！そこで、舞台はベルリンに！■□■

ニューヨークに戻ったジョン・ウィックに対して、ウィンストンが「主席連合から自由になるための唯一の方法は、侯爵との1対1の決闘だ」と勧めたところから、本作の次の舞台はベルリンになる。

もともと、古来のルールを逆手に取った秘策にジョンが名乗りを挙げるためには、ジョンが主席連合のメンバーである絶縁した“家族”ルスカ・ロマに復帰し、その代理となる必要があった。そこで、ジョンがベルリンのルスカ・ロマを訪れると、そのトップはピョートル叔父から彼の娘カティア（ナタリア・テナ）に代替わりしていた。ジョンの反逆のせいで、侯爵がピョートルを討たせたのだった。

そのためカティアはジョンを絞首台に吊るしたが、ジョンが父の殺害を実行したキーラ（スコット・アドキンス）を殺せば組織に復帰させると約束したところから、ストーリーは巨大なナイトクラブ“天国と地獄”におけるキーラとジョン・ウィックとの対決になっていく。そこには、「ベルリンの“天国と地獄”にジョン・ウィック現れる！」との情報を入手したケインとトラッカーも現れたから、同じテーブルについた4人がカードを操るキーラの提案によって、誰が誰を殺すかもしれない4人のバトルが始まることに。

その勝者はもちろん、互いに牽制し合う2人とも共闘してキーラを倒したジョン・ウィックだが、この“天国と地獄”における4人の殺し屋による殺し合いは、アクション映画の歴史に残る名場面になるだろう。

## ■□■決闘のルールが決定！その前に待ち受けるハードルは？■□■

『ジョン・ウィック』シリーズは、血も涙もないマフィアや殺し屋たちによる、ド派手な殺し合いアクションという、今風の見どころ(?)と、主席連合を中心としたさまざまな“規律”、コンチネンタル・ホテルという高級ホテルにおける“秩序”を両立させているところがミソだ。

しかして、侯爵との1対1の決闘の資格を得たジョンは、侯爵のいるパリに現れることに。エッフェル塔を望むトロカデロ広場での協議の結果、決闘は翌日夜明けの6時3分、サクレ・クール寺院にて拳銃で行うことに決定。さらに、細かいルールもすべて決定した。ところが、そこで狡猾な侯爵は代理にケインを指名したから、アレレ？もとよりケインはそれを拒否したいところだが、ここでも娘の命を人質とされたケインはそれができなかったから、結局、旧友同士、生き残れるのは一方のみ、という何とも厳しい現実と直面することに。なお、ジョンの介添人を務めるウィンストンは、ジョンが勝てば、再建されたニューヨーク・コンチネンタル・ホテルの支配人に復帰する、という約束を告知人との間で取り付けることができたから万々歳だ。

もともと、指定の時刻に来ない場合は処刑されるとのルールも決定していたから、侯爵が決闘までにジョンを殺してしまうチャンスはいくらでもある。ジョンはパウリー・キングから特注の防弾スーツと入手困難な拳銃を受け取り、決闘の場を目指したが、他方、敗

北を恐れた侯爵は、賞金を倍増してパリ中の殺し屋にジョンを狙わせたから、さあ、ジョンは指定の時刻に、指定の場所に現れ、1対1の決闘に臨むことができるの？

## ■□■凱旋門カー・フーと階段落ちアクションに注目！■□■

近時の映画に見るアクションの進化は著しいが、カーアクションのそれは、とりわけすごい。しかし、私たちは『ジョン・ウィック』シリーズを観るまでは、誰も「ガンフー」アクションを知らなかったし、本作を観るまでは、誰も「カー・フー」アクションを知らなかったはずだ。しかして、かつての常勝將軍ナポレオンが創ったパリの凱旋門で行われる「カー・フー」アクションとは？本作は全編169分もある長尺だが、ラストの1対1の決闘に至る直前の2大アクションの1つがそのカー・フーアクションだから、それをしっかり楽しみたい。

1対1の決闘前のもう1つのアクションは、決闘の場となるサクレ・クール寺院の目前に見る、222段の「階段落ちアクション」だ。「階段落ち」と聞けば、映画ファンなら誰でも、すぐに『蒲田行進曲』(82年)の「階段落ち」を思い出すはず。そこでは主役の銀ちゃん(風間杜夫)に代わって、決死の覚悟で39段の階段落ちに臨む大部屋俳優・ヤス(平田満)の役者根性が見モノだった。それに対して、本作のサクレ・クール寺院に至る階段は222段だから、『蒲田行進曲』のそれとはスケールが全然違うものだ。決闘の時刻は6時3分と決まっているし、時刻までにたどり着けなかったら処刑されてしまうから、何が何でも222段の階段を上まで登り切らなければ！しかし、上からはそれを阻止するべく、チディとその部下たちが次々とジョンを襲ってきたからジョンは大変だ。もともと、途中からは「義を見てせざるは勇なきなり」と考えた(?)ケインが、ジョンを決闘に臨ませるべくジョンの加勢に入ったから、何とか時間切れ寸前にジョンとケインは222段の階段を上まで登りきることに成功！

これは侯爵にとって何とも意外な結果だったはずだが、1対1の決闘をするのは自分ではなく代理のケインだから、きっと何とかなるだろう。侯爵はきっとそんな風に考えていたはずだが・・・。

## ■□■1対1の決闘の決着は？拳銃の命中距離は？■□■

古来のルールに則った貴族同士の決闘と聞けば、私はオードリー・ヘップバーンが主演した『戦争と平和』(56年)を思い出す。そこでは、“あるきっかけ”から、妻ヘレーネの浮気相手だったばかりか、純真無垢なナターシャを弄んだ、ロシアの貴族ドロコフとピエールとの1対1の決闘が実現！その決闘では、はじめて拳銃を手にするピエールに対して、軍人として素晴らしい実績を誇るドロコフの圧倒的優位が予想されたが、結果はご承知のとおり(?)、ピエールが互いの距離を詰めていく中で偶然躓いたことによって、意外にもピエールの勝ちに終わった。それに対して、厳格なルールに基づく、実力伯仲のジョンとケインの1対1の決闘の決着は？

両者30歩ずつ離れた地点で発砲する決闘といえば、『戦争と平和』以外にも、『OK牧場

の決斗』(57年)をはじめとして、たくさんの西武劇の名作がある。それらを知っている私たちには、ジョンとケインが30歩ずつ離れた地点で互いに拳銃を発射しても当たらないというのは意外だった。そもそも、拳銃の命中距離はどれくらいなの？互いの拳銃から発射された弾が当たらないのは、距離が20歩に縮まった第2ラウンドでも同じだったから、アレレ。しかし、第3ラウンドで10歩に縮まれば必ず命中するはず。下手すると2人とも命中して2人とも死亡！そんな決着も十分予想されるどころだが、その決着は・・・？

## ■意外な“ヒネリ”に感服！これはすごい！■

張芸謀監督の『HERO(英雄)』(02年)、『シネマ5』134頁)は、秦の始皇帝を暗殺するために、秦王が懸賞をかけていた某人物の首と地図を献上することによって、始皇帝に近づいた趙の国の刺客・無名の「十歩必殺の剣」が見モノだった。無名の話では、十歩以内に近づけば必殺の剣になるのだから、武器が拳銃なら、互いに十歩以内に近づけば必ず命中するはずだ。そう考えながら、ハラハラドキドキ感いっぱいスクリーン上を見つめてみると、発射音の後、倒れたのはジョン・ウィック、生き残ったのはケインだったからアレレ・・・。こりゃどうなってるの？

誰もがそう思うはずだが、私は本作のこの意外なヒネリに感服！ここでそのネタばらしをするわけにはいかないが、宮本武蔵と佐々木小次郎が1対1の決闘をした「巖流島の決闘」では、わざと試合時間に遅れて会場に到着した武蔵のさまざまな作戦が結果的に勝ちを呼び込んだが、一方ではそんな不当な(?)やり方は如何なもの？という反発も生んだ。しかし、本作のスクリーン上に登場する、ケインの弾に撃たれたジョン・ウィックの姿も、ジョンの拳銃に撃たれなかったケインの姿も、両者とも完璧に決闘のルールを守った中でのことだから、この結果は受け入れざるを得ない。そこで、とどめを刺すべく侯爵が、倒れ込んだジョンに向かい、自らの手で銃を発射しようとする、アレレ、アレレ、意外にも・・・。「巖流島の決闘」も「OK牧場の決斗」も今日まで語り継がれている名場面だが、本作も間違いなくそれに並ぶような“決闘の名シーン”になるはずだから、しっかりその展開と結末を目に焼き付けたい。

なお、本作はエンドロール終了後、予想通り“シリーズ第5作”の予告となる“あるシーン”が“ある人物”と共に登場するので、最後まで席を立たないように！

2023(令和5)年9月25日記